

甲突川五石橋の建設と背景*

The Construction and the Background of
Five Stone-Masonry Bridges over the Kotsuki River

内山一則**

奥田朗***

吉原進****

UCHIYAMA Kazunori OKUDA Akira YOSHIHARA Susumu

Abstract

The five stone-masonry bridges over the Kotsuki River, which flows along the center of Kagoshima City, have provided a historical outlook to this City. Among them, the Nishida Bridge has ornamental balustrade with beautifully designed balusters and this bridge is very famous as the main gateway bridge of the old Satsuma province. This paper investigates why these stone-masonry bridges were chosen for construction in Kagoshima, which lies at the southern edge of Kyushu, the circumstances of construction of these bridges and so on.

たのか、その背景等を考えるものである。

1. はじめに

鹿児島市の中心を流れる甲突川に架かる五石橋は、1845(弘化2)年から1849(嘉永2)年の期間に、肥後の名石工・岩永三五郎によって架けられ、市街地に歴史的な趣を与えるものとして県民に親しまれてきた4連または5連のアーチ石橋である。なかでも、西田橋は、擬宝珠の高欄があり、薩摩77万石の玄関を飾る橋として知られている。しかし1993年8月6日の集中豪雨による洪水は、流域に甚大な浸水被害をもたらすとともに、五石橋のうち新上橋、武之橋を流失させてしまった。このため、鹿児島県では国の補助事業である「河川激甚災害対策特別緊急事業」を導入して抜本的な河川改修を行うとともに、残った3橋は移設して保存することとした。

石造アーチ橋は、九州では長崎をはじめとして各地で造られているが、鹿児島以外では4連または5連の石橋が5橋も同じ場所に造られた例はない。

そこで、本研究は、これらの石橋が、どうして九州の南端に位置する鹿児島で建設されることとなっ

2. 薩摩藩の歴史¹⁾

島津家は、今からおよそ800年前、^{これむねたひさ}惟宗忠久が源頼朝から南九州に広がる日本最大の荘園島津荘の^{げすし}下司職・^し地頭職に任命され、島津を姓としたことに始まる。関ヶ原の戦いでは西軍に加わった島津家も、1602(慶7)年18代家久^{いえひさ}が徳川家康に本領を安堵され、徳川幕府における薩摩藩が始まる。以来、大広間外様大名として、幕府の監視のもと、およそ250年間も続くが、^{とじよう}外城制度、^{かどわり}門割制度、^い一向宗禁制をもって、藩体制を支える大きな柱としていた。

しかし、18世紀も後半になると、徳川幕府の政治は乱れ、天明、天保の飢饉に加えて、松平定信の寛政の改革(1787~1793)や水野忠邦の天保の改革(1841~1843)も効果がなく、幕府の財政は逼迫し、その弱体化と社会の不安定化が進んでいた。

一方、薩摩77万石(これは^{もみ}初高であり、実質は40万石足らずであった)は、加賀100万石に次ぐ大名と見られていたが、江戸時代のはじめから藩

* keyword 石造アーチ橋、甲突川五石橋、薩摩藩史、御門、擬宝珠
** 正会員 鹿児島県土木部都市計画課 千890-77鹿児島市鴨池新町10番1号
*** 正会員 (財)先端建設技術センター(前鹿児島県土木部長)
**** 正会員 鹿児島大学工学部海洋土木工学科

の台所は苦しく、1602(慶長7)年家久が初めての上洛の時、途中旅費が不足して福島正則から銀200貫を借用したことは有名な話である。そして、将軍家との婚姻(1729)、木曾川の御手伝普請(1754~1755)と藩の財政は苦しくなる一方であった。

さらに、25代重豪は、先の婚姻で島津家に嫁いだ竹姫(京都で生まれ、大奥で育った)に養育された影響で、薩摩藩の文化向上に熱意を注いだ。例えば、1773(安永2)年の造士館、演武館をはじめとして、医学院や明治館という天文台を築いた。参勤交代のおりには、京都、大阪で見聞を広め、時には長崎にも立ち寄り歴代のオランダ商館長と親しく交わったりして「蘭癖大名」とまで言われた。中国語辞書「南山俗語考」をはじめ、「鳥名便覧」、「成形図説」等多くの図書を編纂し、それら中のいくつかを刊行したりした。また一方では、他の藩と積極的な婚姻政策をとるなどしたため、苦しい財政はますます苦しくなっていた。しかも、度重なる火難を受け、1696(元禄9)年の鶴丸城の大火、1785(天明5)年、1789(天明9)年の田町藩邸の火災、1788(天明8)年の京都火災による藩邸の焼失、1789(天明9)年の桜田藩邸の火災、1803(文化3)年の江戸藩邸の焼失等も藩の財政を苦しめることとなった。

重豪は、1787(天明7)年家督を長男齊宣に譲ったが、1807(文化4)年に齊宣は、藩の財政を立て直すため、樺山主税、秩父太郎等と徹底的な緊縮政策を行った。しかし、これは重豪の今までの政策を否定してしまうことになり、重豪の激怒するところとなって、1809(文化6)年には、家督を齊宣の子供の齊彬に譲らせてしまった(文化朋党事件)。

また、1809(文化6)年以降は、高輪邸に重豪、白銀邸に齊宣、芝邸に齊彬が、それぞれ江戸暮らしをしており、島津家は四重の生活費を賄わなければならなかった。

このような状況の中で、調所笑左衛門広郷が、1830(天保元)年に重豪や齊彬から財政改革を命ぜられることとなる。この「天保の改革」は成功をみるが、その後、調所の自殺、島津久光の生麦事件、薩英戦争、さらには明治維新と、日本は薩摩藩を舞台に目まぐるしく動いていく。

この新しい時代への流れの中に、調所の「天保の改革」があり、そして、その改革の一環として甲突川五石橋(以下「五石橋」という)の建設が位置づけられる。

表1 薩摩藩近代史の流れ⁶⁾

年 代	薩 摩	島津家藩債の累計	日本、世界
1600(慶長5)年	17代家弘、関ヶ原の戦いで西軍に加わり、敗れる		
1602(慶長7)年	18代家久、本藩を安堵され、大広間外様大名となる		
1626(寛永3)年	家久、中納言に任ぜられる		
江戸時代初期	島津氏の藩主権を確立(外様制度、門閥制度、一向宗禁制など島津独自の支配体制を敷き、幕末まで続く)	1638(嘉永15)年 藩債 13万両	
~中期	22代徳重と五代将軍綱吉の養女竹姫との婚姻(1729(享保14)年)	1667(寛文7)年 藩債 34万両	
	木曾川の御手伝普請(1754~5(宝暦4~5)年)	1753(宝暦3)年 藩債 66万両	
1755(宝暦5)年	25代重豪、藩主となる	1755(宝暦5)年 藩債 88万両	西洋では産業革命
	重豪の嫁竹姫と11代将軍家斉との婚姻(1776(安永5)年)		天明の大飢饉(1782~87)
	重豪の関白の積極策(造士館、演武館、医学院、天文館)		
1787(天明7)年	26代齊宣、藩主となる	1805(文化2)年 藩債126万両	
1808(文化5)年	齊宣、樺山主税、秩父太郎等「文化朋党事件」		
1809(文化6)年	27代齊興、藩主となる	1817(文政元)年 藩債 90万両	
1830(天保元)年	調所笑左衛門広郷、天保の改革に着手	1826(文政10)年 藩債500万両	天保の大飢饉(1833~39)
1846(弘化3)年	琉球の対仏貿易が許可される		大塩平八郎の乱(1837)
1848(嘉永元)年	調所笑左衛門広郷、28代齊彬と幕臣阿部正弘の策により自殺		アヘン戦争(1840)
1849(嘉永2)年	お由緒騒動		水戸忠邦、天保の改革(1841)
1851(嘉永4)年	齊彬、藩主となる		
	齊彬、洋式産業の採用と振興、また、国防に力を入れる		ペリー来航(1853)
1858(安政5)年	齊彬急死、29代忠義が藩主となるが久光が実権を握る		日米和親条約(1854)
1862(文久2)年	寺田屋事件、生麦事件		安政の大獄(1858)
1863(文久3)年	薩英戦争に敗れ、洋学知識の採用		下関事件(1864)
1864(元治元)年	禁門の変		池田屋事件(1864)
1866(慶応2)年	坂本龍馬の仲介で薩長同盟成立		
1867(慶応3)年	薩摩藩に討幕の密勅、大政奉還		
1868(明治元)年	王政復古と維新政府樹立		戊辰戦争(1868)

3. 調所の天保の改革

調所は、1776(安永5)年下級士族川崎主右衛門の次男に生まれ、清八といった。1788(天明8)年に調所清悦の養子となり友治と改名し、1790(寛政2)年表坊主となり養父の名を襲し、1798(寛政10)年には隠居重豪付奥茶道となって笑悦と改名した。その後、1811(文政8)年には茶道頭、1813(文政10)年には小納戸となり、このとき還俗して笑左衛門と改めた。さらに、1818(文政15)年使番、1822(文政5)年町奉行、1824(文政7)年側用人格兩隠居統料掛等を歴任し、1825(文政8)年側用人側役勤となった。¹⁾

ここで、兩隠居統料掛という役目は、重豪・斉宣の経費係りである。経費の財源は、重豪が幕府の許可を得た琉球中国間の、ごく限定された貿易の収益で充てるものであったが、調所がこの役目を引き受けると大いに業績をあげた。²⁾

このようなことから、1830(天保元)年12月に調所に対して、重豪・斉興から朱印書で三箇条の大命が直々に下されることとなる。大命は「①天保2年から11年までの10年間に、50万両の貯蓄すること。②そのほかに、幕府への上納金や非常時の金もなるだけ蓄えること。③古借証文を回収すること。」という内容であった。³⁾

まず、調所が最初に手を着けたのが支出の面である。江戸の支出の縮小をはじめ、諸産物の生産から販売に至る手続きの合理化を図った。次には、農事の指導監督を行い、薩摩米の悪評を取り除き薩摩米の価格を上げたり、菜種子、はぜろう、うこん、朱粉等国産の改良増産を行った。奄美3島で生産させる黒糖についても専売を強化して利潤増大を図った。その他、主な施策としては表2に掲げたとおりである。

また、密貿易でも多大の利益を上げていたとされ、ついには、偽金造りまで行っていたと言われている。⁴⁾

さらには、藩の借入金500万両を250年払いの無利子返還として事実上の借金踏み倒しを行ったことは有名な話である。⁵⁾

この改革で、調所は、後に「調所の懐刀」と言われる海老原清熙をはじめとする能力ある人材の採用、格式を破った町人の活用などを行っているが、これはまた、身分にとらわれない能力ある者が活躍できる風土をつくりだしていくことになる。

なお、調所は、財政改革に成功したものの、1848(嘉永元)年に自殺したとされ、それは、斉彬が斉興を隠居させるために、調所の失脚をねらって幕臣阿部正弘と策を練り、薩摩藩の密貿易を追求して責任をとらせたためと言われている。⁶⁾

表2 天保の改革の施策⁸⁾

施策	具体的な事柄
国産品の改良増産 支出節減の努力 諸蔵の改善 諸役、役場の整備 運送船の建造 諸蔵・土木工事の奨励	米、黒糖、ろう、菜種子、うこん、朱粉、菜種等の改良増産 江戸経費の節減、借入金500万両の250年年賦、厩・山林の改革 諸蔵の管理出納方法の改善、買物方蔵の設置等 人柄吟味による人材抜擢、各部局の責任分担制等 日州御用船、三島方御用船等の建造 三都の各藩邸の作事、道路修繕、橋梁架設、河川改修、新田開発等
農政改革 琉球外交問題の処理 軍政改革 唐物貿易の拡大	離散農民の引戻し、高利貸規制と掛銭禁止、農作業の奨励、上見部下りの廃止等 琉球に対するフランス通商要求問題の処理 洋式軍事技術導入、鉄砲・弾薬製造、台場築造、軍役方設置、給地高改正等 唐物方方の販売権延長と密貿易

ところで、1840(天保11)年頃には、調所の改革施策は相応の成果を上げ、当初の貯蓄目標50万両のほかに諸営繕の用意金も蓄えることができた。ここに土木・諸営繕事業、軍政改革、農政改革など内需に

よる経済政策が進められることとなる。⁹⁾

これらの土木工事、諸営繕に要した費用は200万両¹⁰⁾といわれ、藩の年間予算十数万両と比べ、その力の入れ方がわかる。

図1 天保の改革の波及効果¹¹⁾

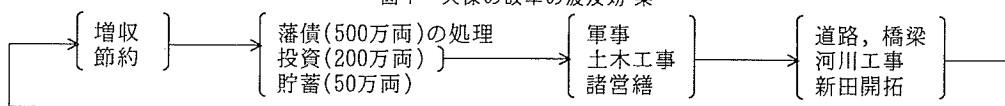


表3 天保の改革における主な土木工事の事例¹²⁾

主な土木工事	具体的事例
建物の補修	三都の各藩邸、寺院の作事、国元各地の神社仏閣、磯・玉里・花倉各邸、造士館、医学館、天文館等の補修
道路橋梁の補修	農閑期に道路の修繕等
新田干拓埋立	国分小村新田、黒川新田等
河川改修	曾木川改修、甲突川改修、新川改修、二反田川改修等
石橋架設	甲突川五橋を含め三十数橋

4. 土木工事の推進と石造橋の建設

すでに江戸時代初期の頃には、薩摩藩の土木技術はしっかりしていたとされ、当時のものとして、鶴丸城の築城（1602(慶7)年）、本御門橋（1606(慶11)年）、加治木の欄干橋（1606(慶11)年）、1723(享8)年創設の冷水から鶴丸城にひかれた水道施設など優れた土木構造物がある。その後は、1754～5(宝4～5)年の木曾川の御手伝普請などがある¹⁾。

また、薩摩の石造物としては、磨崖仏、墓、石塔、仏像及び仏教神、民族神、田の神等があるが、石造り技術については、慶長から元禄、享保の頃までは良かったが次第に低下して、幕末の頃は脆弱なものになってしまっていたとされている²⁾。

このような中で、天保の改革の土木工事は進められることとなる。

さて、甲突川に目を向けてみると、この川は、昔は新上橋のあたりから左折して東方に向かって流れていたが洪水のたびに流れを変え、1592頃(文禄)以前には南の方に川筋を変えていった。さらに、1602(慶7)年の頃から城下整備の一環として河川改修が行われ、現在の川筋になったという³⁾。しかし、天保以前には川底の浚渫や堤防の修繕を行ったことはなく、時々、桜島より人夫を召集して堆積物を除去していたとされるが川の屈曲や堤防の凹凸などが多く、毎年のように洪水に見舞われていたとされている⁴⁾。そして、1838(天保9)年甲突川は大洪水を引き起こした⁴⁾。

洪水による城下の浸水被害は大きなものがあり、また、倉庫群の浸水は集積物に損害をもたらすことなどから、城下の治水と産業振興のためにも、甲突川の改修が急がれることとなったと考えられる。

まず、1842(天保13)年新上橋より下流の川幅統一及び川底浚渫のため測量が行われ、改修が進められていった。このとき川底を浚渫し、河口右岸の砂置き場としたのが、今の天保山であると言われている⁵⁾。

ところで、調所は、財政改革を命ぜられてから諸藩の施策、施設を調査していたと言われ、現場を見たことがあるのか、誰からか聞いたのか、土木工事の大任を負わすべき技術者を肥後に見つけていた。それが石工・岩永三五郎である⁶⁾。

1840(天保11)年頃、三五郎を招⁷⁾聘^し、河川改修、道路・橋梁の補修、新田開発と幅広く、また、精力的に工事を行わせた。三五郎は、「性質淡薄寡欲まことに良工なりしは人の能く知るところにして水利を視、損失を考え大数を測るに敏なる所にして、初めて見る地と雖も神の如し⁸⁾」と伝えられ、さらに、「三五郎は筆算に拙き者故、阿蘇副⁹⁾うて常に之を補う⁸⁾」として、大工頭の阿蘇鉄矢が、補佐役としていっしょに腕をふるうことになる。

このような経緯から、甲突川改修と併せて五石橋が架けられることになる。まさに、五石橋は薩摩の土木技術と肥後の架橋技術の結晶と言える。

5. 五石橋の架設目的

日本では古来、軍事上から城下の堀や河川には木橋を架け、石橋のような永久橋は架設しないものとされてきた。事実、鹿児島よりも早く石橋技術の伝わっている佐賀、福岡、熊本等城下を流れる河川には江戸時代末期まで石橋は架けられていない。石橋が架けられているのは、城下より遠く離れた主要路やもっぱら農山村部に限られている。

しかし、薩摩藩では、木橋を石橋に架け替えた。それは、例えば、菱刈では年貢米の運搬に苦勞していたから曾木川の改修を行って船運を開いたり、また、大隅半島の横断水路も計画していた¹⁾ことからわかるように、輸送力の確保を第一としたためと考えられる。維持管理の必要な木橋の代わりに、堅牢な石橋に架け替えて、維持の経済性や交通の安全性を確保したかったのだろう。

また、薩摩藩では、昔から天守閣のある城は造らず、外城制度により地方に武士を配置させ、「城を

持って守りとなさず、人を持って守りとなす²⁾」としており、天保年間(1830年の頃)の鹿児島城下絵図(以下「城下絵図」という)を見ると、甲突川を挟んで町並みはすでにできていることから、城下の防御のことより交通の利便性を向上させ、産業振興を優先したとも考えられる。

なお、そのころ薩摩藩では、軍政改革や大砲の研究に着手しており、橋は軍事上の重量物を渡す必要もあったのかもしれない。

ところで、五石橋には、古くより「万一、敵が攻めてきた場合、簡単にこちらを見通せないようにわざわざ勾配をつけ、橋脚に材木や土砂をからませ、河流を塞ぐと水は河外に溢れて濠の役をする³⁾」、「お互いに見通しがきかないような位置につくられている。こうすると、敵が橋の1つに押し寄せてき

ても、気づかれないよう、見えない別の橋を渡って敵の背後を突くことができる。』⁴⁾、「橋のどこかの石を一つとると橋全体が崩れるのだ。』⁵⁾」などの言い伝えがある。これらは、五石橋を戦術的な観点から見た場合であるが、他の城下と違って石橋を架けたために、流言として意識的に広められたとも考えられる。なお、最後に架けられた玉江橋は、既設の木橋がないところに架けられているが、この橋こそ戦術上の理由から架けられたものであるという説もある⁶⁾。

いづれにしても、五石橋は、産業・交通上の要請として必要なものであったと考えられる。このような五石橋の建設費は表4に示すように莫大なものとなったが、結果としていずれも当時の九州ならず、日本を代表する長大石造橋となったのである。

表4 五石橋の建設費⁷⁾

橋名	架設年度	工費(両)A	橋脚(間)B	橋長(m)C	橋面積(㎡)D	A/D(両/㎡)
新上橋	1845	2,415	5.0	46.8	234.0	10.3
西田橋	1846	7,127	6.2	49.6	307.5	23.2
高麗橋	1847	2,800	5.4	55.0	297.0	9.4
武之橋	1848	2,400	5.5	71.0	390.5	6.1
玉江橋	1849	1,560	4.7	51.0	239.7	6.5
計		16,302			1,468.7	11.1

6. 御門と擬宝珠

五石橋の機能面や形態面の特徴として、①単一の緩曲面路面で近似できること、②路面が低く桁下空間は小さいこと、③壁石は扇形に積まれ二重アーチに見せるように工夫されていること、④アーチ石と壁石はいずれも目地に漆喰などの詰めものを使わない空積みであること、⑤耳石が路面両側に壁石面より突き出していること、⑥ユニークな形の水切り石が石橋の側面形に強い印象を与えることなどがある¹⁾。参勤交代の道筋にある西田橋については、さらに、御門と擬宝珠という特徴を持っており、ここでは、この2つについて考察しておく。

(1) 御門

鹿児島より上国に通ずる街道としては西目、東目の2つがあった。西目は、西田町から水上坂を上り、伊集院を経て市来、川内、出水等を通る街道であり、東目は、磯から加治木、横川、大口、山野を経て肥後の水俣に出る街道であった²⁾。

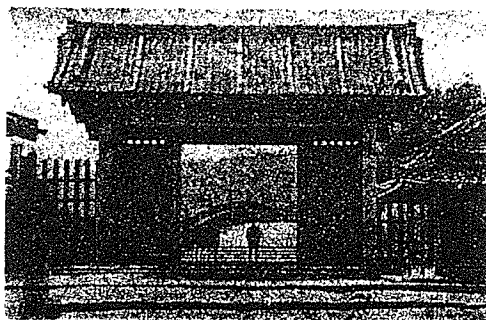
西田橋は、西目街道上の甲突川に架かっており、

薩摩藩の玄関口として、決には番所の他に御門があり、御門は1772(享和4)年に建立されたと記録がある³⁾。

城下絵図に描かれている御門と石橋架け替え後の写真⁴⁾の御門を見比べると、門の形や門と橋との位置関係が少し違っている。表4からみると西田橋の建設費が他の4橋に比べて飛び抜けて高額であり、(西田橋が丸く加工した石を使って高欄を造ってあるなど、他の橋より特に念入りに造られたことは事実であろうが、)この御門も石橋建設時に造り替えられたと推測することもできる。

なお、御門はその後、焼失又は撤去されてしまった。

写真1 西田橋御門⁴⁾



(2) 擬宝珠

西田橋についての擬宝珠に関する話題は、昭和初期の頃、擬宝珠銘の年代偽造説が起こり、昭和中期これが否定され終わっている。

擬宝珠は、もともと塔頂を飾る宝珠（宝珠は海底に住む竜王の頭から出現したもので、毒にも火にも侵されない不思議なもの）から派生したもので、我が国へは、仏教建築とともに伝えられたと言われている。古来、日本の橋には彫刻を飾る習慣はなく、親柱や束柱の上に取り付けられた擬宝珠が、唯一の飾りだったが、欄干の柱の頂部を腐食から守るという役割ももっている。

我が国の擬宝珠としては、古くは平城京跡から出

土している。また、橋の親柱に擬宝珠が取り付けられているのは、「信貴山縁起絵巻」に描かれている平安宮東面の陽明門又は待賢門と思われる門の前の外堀に架けられた橋が最も古い例だとされている。さらに、「一遍常人絵伝」に描かれた京都の四条橋にも見られることから、おそらく鎌倉時代中期には、かなりの橋に擬宝珠が使われていたと考えられている。現存する最古の擬宝珠は、広島県の厳島神社の反橋につけられているもので、弘治3年(1557)の銘がある。⁵⁾

鹿児島では1612(慶長17)年に架けられた加治木の欄干橋など表5の橋で擬宝珠があったことが知られている。⁶⁾

表5 鹿児島の擬宝珠のついた橋の例

橋名	架設年代	擬宝珠銘、備考
本御門橋 加治木欄干橋	1606(慶長11)年 1606(慶長11)年	12個の擬宝珠 「慶長十一年丙午三月吉日」 10個の擬宝珠 「慶長十七年壬子六月吉日」 ⁷⁾ 「慶長十七年壬子六月吉日」 ⁷⁾
西田橋(木橋) 新橋(木橋) 太平橋	不詳 鶴丸城築城と同じ頃 1835(天保6)年には擬宝珠があった ⁸⁾	

さて、石橋となった西田橋の擬宝珠に「慶長十七年(1612)壬子六月吉日」と銘があり、一方、留石の面には「弘化三年(1846)丙午九月十三日留石」と刻されている。このため、徳川幕府の法度では中納言以上でなければ擬宝珠を設置できなかったことから、徳川幕府の目をごまかすために、法度施行以前に遡って「慶長十七年」と擬宝珠に刻されたという、年代偽造説⁹⁾が起こった。

しかし、島津家久が中納言に位されたのは、1616(寛永3)年であり、1612(慶長17)年よりも14年も後のことである。また、1835(天保6)年来鹿した江戸の軍談師伊東凌舎が書いた「鹿児島風流」には「西田橋、御門の橋、新橋、太平橋、いずれもネギ宝珠なり」と出ているという。さらに、城下絵図を見ると、これにも擬宝珠のある木橋の西田橋が描かれている。⁸⁾

これらのことから、西田橋の擬宝珠は、木橋を架けた(或いは架け替えた)ときに橋に飾られ、その後、橋は幾度も架け替えられたが、そのまま踏襲されてきたもの^{8) 11)}と考えるのが妥当である。

そして、青銅の擬宝珠は戦争中に、陶器のものに置き換えられ、その後、昭和27年の修理の時、破壊されていた陶器の擬宝珠7個(現状では8個)を、市に保管されていた擬宝珠から型を取り鉄製青ペン

キ塗りとした。¹²⁾

写真2 鹿児島市立美術館に保管されている擬宝珠



なお、鹿児島市立美術館に1個の擬宝珠が保管されており「慶長拾七年(1612)壬子六月吉日」という銘がある。

ここで、擬宝珠の形の変化についてみた場合、鷹見安二郎の研究¹³⁾によると時代とともにネギボウズの形、胴のバランスや節の数が変わっており、市立美術館蔵の擬宝珠は、江戸時代初期以前の形と似ているので、銘文どおりの制作ではないかという推測が成り立つ。

また、銘から、西田橋が新橋のものである可能性があるが、いずれかのものであるとした場合、その

擬宝珠の裏面には、「十四ノ？」の番付があり、城下絵図によると、木橋の新橋は10本の高欄柱で木橋の西田橋は14本の高欄柱であるので、西田橋のものではないかという推測が成り立つ。

図2「天保年間鹿児島城下絵図」より西田橋

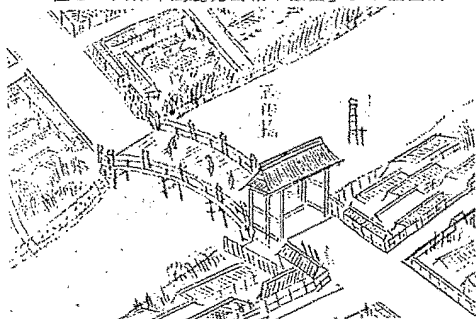
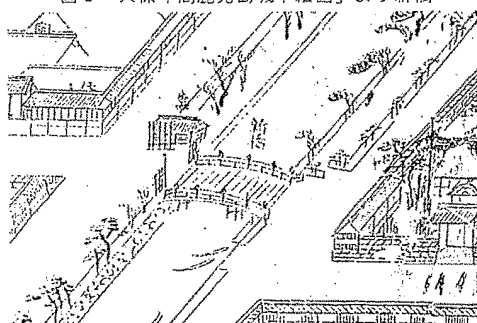


図3「天保年間鹿児島城下絵図」より新橋



さらに、西田橋の現況調査結果から、小柱の擬宝珠の座径は1尺1寸1分6厘(35.3cm)であり、市立美術館蔵の擬宝珠の座径は1尺1寸3分5厘(34.4cm)とほぼ一致することから、木橋時代の擬宝珠がそのまま石橋に踏襲されたとすると、小柱14本に載せ、残りの親柱と袖柱の擬宝珠は石橋創建時に補加されたとも推測できる¹⁴⁾。

これらに関しては、もう少し検証する必要もある。

7 おわりに

九州における石橋は、長崎においては石橋文化を持った移住者や貿易で蓄財した商人により公共奉仕として、熊本では農民と庄屋により年貢米の運搬や農業用水路等としてそれぞれ建設されたが、鹿児島¹⁵⁾の五石橋は、薩摩藩による城下整備の必要性から建設されたものである。

五石橋建設は、天保年間に行った財政建て直しの

成功によるが、それは、薩摩藩が日本の南端に位置し、幕府の監視が厳しくなかったために他の藩ではできなかった密貿易等が可能であったり、黒糖の生産地である島々が領地であったという地の利が大きい。

また、薩摩藩は、木曾川治水で代表されるような土木の技術を持っていたし、すぐ隣藩にその頃最高の石橋技術を持っている人々がいたことも背景として大きい。

さらに、薩摩藩の防御は、外城制度による「城をもつて守りとせず、人をもって守りとなす」という考え方であり、藩主の城近くに堅牢な石橋を架けても防御上差し支えなかったものと考えられる。

このように、財政力、技術力、橋の役割の考え方が準備できた薩摩において、まさに、城下の生活・産業基盤の向上を図るための社会資本として五石橋が建設されたものである。

そして、薩摩で培われた石橋の技術は明治維新後、東京、さらには東北へと伝えられることとなる。

参考文献及び注釈

2 薩摩藩の歴史

- 1) 例えど-1鹿児島県、「鹿児島県史第2巻」, 1980復刊, 近藤出版社, 1939,
-2芳即正,「島津重豪」, 吉川弘文社, 1980,
-3原口虎雄,「幕末の薩摩」, 中央公論社, 1966; 等
- 2) 地方を百数十の「外城」に分け, 家臣団を屯田させ農耕によって自活させた。この地方居住の武士たちは, 普段は行政庁である地頭版屋を中心に, 「罷」という武士集落をつくり外城行政を行って, 戦でも起こると地頭の下に動員されるといふ仕組み。
- 3) 「門」とは, 5つ前後の家族から構成されていた。薩摩藩は, 「門」単位に耕地, 年貢, 旗役(門高)を与え, 門高は一定の年割ごとに割譲えられた。
- 4) 一向一揆を警戒して, 土民の思想統制を強化し, 特に農民の連帯組織の結成を阻止しようとした。
- 5) -1鹿児島県,「鹿児島県史第2巻」, 1980復刊, 近藤出版社, p. 7, 1939; 「お由良崩れの關係者として土民の怨を受くること深慮且つ非違もありて騒擾を下ざるを深慮せしにや嘉永元年十二月七十三歳にして江戸の藩邸に於て毒を仰き自殺したり。…。或いは謂ふ薩摩の自殺は密貿易を行ひしことを幕府に告ぐる者ありたる為一身に責を負ひたるなりと。又謂ふ自殺したるに非ず只適に吐血して病死したるなりと。」と記されている。
-2前掲 2 1)-3, pp. 159~168; 斉彬が, 調所を失脚させて斉興を廢居させるため, 幕府に密貿易のことを漏らし, 調所は幕臣阿部からそのことを責められ罪を一身にかぶって自殺したと記されている。
- 6) 増留賢朗,「五石橋を考える」, 南日本新聞開発センター, p. 92, 1987; より「島津藩・信託業後年表」の部分を引用しその他は筆者作成

3 天保の改革

- 1)「調所廣郷履歴」
- 2)-1原口虎雄,「幕末の薩摩」,中央公論社,pp.61~62,1966
-2尚古集成館,「島津家おもしろ歴史館」p.50
- 3)-1鹿児島県,「鹿児島県史第2巻」,1980復刊,近藤出版社,p.256,1939
-2原口虎雄,「幕末の薩摩」,中央公論社,p.81,1966
- 4)密貿易;重豪は、琉球中国間のごく限られた範囲の貿易について、幕府の許可を得ていたが、調所は、この貿易をさらに拡大して莫大な利益を上げたと言われている。
- 5)偽金造り;現在の鹿児島市の北東のはずれにある花倉に、建物を造り、お化け屋敷に仕立て、二百数人で偽金(一分金、二分銀)を造っていたという。
- 6)500万両の踏み倒し;調所は片腕であった大阪の商人浜村と相談し、古い謄文を書き換えるという名目で、商人から謄文を回収し、それ焼き捨て、引き換えに250年で償還するという内容で利息の記載がない通帳を渡した。これは大変な騒ぎになったが、島津家や調所には何の沙汰もなく、浜村だけが塙に追放されただけであった。また、この償還は明治の旧藩債の清償宣言まで続いた。
- 7)前掲2 5)と同じ
- 8)芳即正,「調所広郷」,吉川弘文社,1991を基に著者作成
- 9)鹿児島県,「鹿児島県史第2巻」,1980復刊,近藤出版社,p.259,1939
- 10)芳即正,「調所広郷」,p166,吉川弘文社,1991
- 11)著者作成
- 12)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1934より著者作成

4 土木工事の推進と石橋の建設

- 1)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,pp.135~138,p192
- 2)野村孝文,「鹿児島県文化財報告書第2集」,鹿児島県教育委員会,p.85,1953
- 3)鹿児島市,「鹿児島市戦災復興誌」,南日本新聞開発センター発行,pp.44~47,1982
- 4)「鹿児島藩小史料」
- 5)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,p.15,1934
- 6)三五郎は1793(寛政5)年に生まれ、熊本ですでにいくつかの石橋を架けており、1840(天保11)年、鹿児島へは棟梁として野津石工、種山石工などを連れてきた。1849(嘉永2)年まで三十数橋の橋を架け、1851(嘉永4)年八代郡野津手永銀町村において59才で死去したとされる。
- 7)「海老原清熙履歴概略」
- 8)「海老原清熙履歴概略」
- 9)郷土史家小倉一夫の研究によると、阿蘇鉄矢は、1801(享和元)年阿蘇政直の二男として生まれた。小さい頃より繕工物に長け、20才の頃鹿児島に出て修業し名を知られるようになった。天保6年御用大工に取り立てられ、まもなく藩の大工頭となった。その後、岩永三五郎の片腕となって藩内各地で土木事業に携わる。三五郎が帰った後は江戸高輪藩邸の修復(1854~5)や京都御所の造営工事(1855)を行った。その後、鹿児島に帰り、初代太平橋を架け、1886(明治19)年85才で死去した。

5 五石橋の架設目的

- 1)芳即正,「調所広郷」,吉川弘文社,pp.175~176,1991
- 2)鹿児島市立美術館蔵「天保年間鹿児島城下絵図」,六曲半双屏風
- 3)鹿児島史談会,あま名橋のこころ誰か知る,三州談義,p.11,1969.4
- 4)鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校創立五十周年記念実行委員会,「鹿児島上町の歴史と文化」,瀬上印刷,p123,1890
- 5)鹿児島市西田国民学校,「西田少年読物」,鹿児島県教育会印刷部,p.20,1943
- 6)増留貴樹,「五大石橋を考える」,南日本新聞開発センター,pp.129~130,1987
- 7)金額については宮之原源之丞,「御産物御仕立金銀銭両納高萬控」,橋梁諸元については鹿児島市の「橋梁台帳」と鹿児島県土木部都市計画課「西田橋解体後元調査委員会」の資料を基に著者作成

6 御門と擬宝珠

- 1)吉原進,「鹿児島県甲突川五石橋の形態的、構造的特徴」,土木史研究16,pp.206~207,1996
- 2)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,p.134,1934
- 3)藩法研究会編,「藩法集8 鹿児島藩下」,p.233
- 4)島津忠義公コレクション,尚古集成館所蔵
- 5)土木学会関西支部,「橋のなんでも小事典」,講談社,pp.288~293,1991
- 6)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,pp.135~145,1934
- 7)「三国名勝図会」,南日本出版文化協会,復刻(1966)版,pp.45~46,1843
- 8)城南迂人,西田橋の擬宝珠考,さんざし,p36,1962.12
- 9)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,p.143,1934
- 10)-1鹿児島市,「鹿児島地誌」,鹿児島県教育会印刷部,p.328,1935
-2野村孝文,「鹿児島県文化財報告書第2集」,鹿児島県教育委員会,p.87,1953
- 11)鹿児島県土木課,「鹿児島県維新前土木史」,1985復刻版,p.144,1934
- 12)野村孝文,「鹿児島県文化財報告書第2集」,鹿児島県教育委員会,p.89,1953
- 13)鹿見安二郎,橋の擬宝珠の形について,洋世絵梁2,PP.14~16,1936
- 14)鹿児島県土木部都市計画課,「第5回西田橋解体後元調査委員会 資料」1996.7.8